

盛岡市動物公園『ZOOMO』がめざす動物・人・自然の共生。



平成元年開業から30年以上にわたって市民に愛された盛岡市動物公園は、老朽化に伴い令和3年に休園。運営母体を新たに、令和5年4月『ZOOMO』という愛称でリニューアルオープンしました。「one world-one health」を理念に掲げる、同園のめざす姿について伺います。

リニューアルした盛岡市動物公園。入り口に続く道沿いに動物のオブジェが並び、期待感を演出しています。

未来を見据えたリニューアル

盛岡市動物公園ができたのは、平成元年4月。盛岡市市制100周年記念施設の一つとして開園しました。盛岡の子どもたちが気軽にに行ける動物園を！という市民からの請願を受けて昭和55年から討議を重ね、8年越しで完成した同園。盛岡市を見下ろす岩山南公園の一部を生かし、バックヤードまで含めて37ヘクタールの動物園は自然豊かな盛岡の特徴として全国から注目されました。

オープン直後、平成元年の来場者は26万人を記録。平成3年にはアフリカ園もオープンし、およそ100種の動物たちが自然の中でゆったりと過ごせる動物園は、市民にとって憩いの場として定着しましたが、30年の時を経て老朽化が進み、環境や時代のニーズに合った施設にすべく今回のリニューアル計画に至ったのです。

それは獣舎の建て替えや動物の入れ替えなど、ハード面のリニューアルした。動物を見る視点を変えることで臨場感あふれる展示が増えていきます。また、クマ舎やイヌワシ舎などをはじめ、動物が生き生きと暮らせる環境を整備したことが結果的に来園者にとっての見やすさにつながっています。さらに、来園者の休憩ポイントを増やし、今まで以上にゆっくり過ごせるよう、心地よいランドスケープや進路を示すゾーニングにも力を入れていきます。

動物園全体の景観を整備することで来園者の過ごし方が変われば場の価値も加わり、自ずと人が集まる環境になっていきます。オープンから半年経った今、来場者からも「動物が近くなり、巡りやすくなった」との声が多数寄せられています。

人も動物と共に在ることを感じられる施設に

これまでの来場者は子ども連れが中心でした。動物園でのふれあいや自然の中で過ごす時間を楽しんでもらうのはもちろんですが、もっと幅広い世代が『ZOOMO』で過ごす時間そのものを楽しんでもらいたい、と荒井さん。動物園という視点を生かし、さまざまな社会課題を解決する仕組みをつくっていききたいとのこと。現在力を入れているのは、老朽化



ショップには、地元工芸作家とのコラボ商品など、『ZOOMO』ならではのオリジナルグッズが並びます。

令和5年4月、リニューアルした盛岡市動物公園は『ZOOMO』（以下『ZOOMO』）という愛称で、新たなスタートを切りました。もともと同園は、盛岡市100%出資の公益財団法人盛岡市動物公園公社が運営を担っていました。しかし、老朽化に伴う運営費全てを市が負担しきれないこともあり、付加価値創出に向けた再生事業として、令和元年に民間51%盛岡市49%出資の「株式会社もりおかパークマネジメント」を設立。リニューアルに向けた計画を進めてきました。市と民間が出資した株式会社動物園の運営母体となるのは国内初とのこと。全国から注目されています。

そのコンセプトは「人と動物と自然が共生する動物公園」。生物の多様な生き方や関係を伝える社会教育に限るものでなく、未来を見据えた運営スタイルの転換、コンセプトの再構築を含む再生事業です。
新体制で理念共有
令和5年4月、リニューアルした盛岡市動物公園は『ZOOMO』（以下『ZOOMO』）という愛称で、新たなスタートを切りました。もともと同園は、盛岡市100%出資の公益財団法人盛岡市動物公園公社が運営を担っていました。しかし、老朽化に伴う運営費全てを市が負担しきれないこともあり、付加価値創出に向けた再生事業として、令和元年に民間51%盛岡市49%出資の「株式会社もりおかパークマネジメント」を設立。リニューアルに向けた計画を進めてきました。市と民間が出資した株式会社動物園の運営母体となるのは国内初のこと。全国から注目されています。

「飼育事業だけでなく、動物の心と体に配慮した飼育、園内環境保全、動物園にはめざらしいですが、人の福祉にも関わっていききたいと考えます。例えば、園内散策を通じた健康維持の企画、夏なら熱中症対策のセミナーなど。動物園というキーワードは、子どもとその家族をメインにしがちですが、地元企業と連携しながら幅広い世代が集まる取り組みを進めていきたいですね。人や地域経済の循環を促すハブ機能を持つ、そんな動物園でありたいと思っています。」



同園では10年以上飼育員として勤務した荒井さん。新しい視点で園の運営に関わっています。

施設として、さらに動物を身近に感じたり自然を楽しんだり、さまざまな過ごし方で誰もが日常的に利用できる、公園の中にある動物園です。「one world-one health」——人、動物、環境（生態系）の健康は相互に関係して一つである——という理念のもと、野生動物の保全のみならず、自然環境の保全、人の福祉、動物の福祉に資する事業展開を進めていきます。

ランドスケープの再構築

同園の企画営業広報・荒井雄大さんに、コンセプトに基づく取り組みのスタンスを伺いました。

「そもそも動物園は、単純に動物を見て癒されるだけの施設ではありません。その動物が暮らしている環境に想いを馳せたり、絶滅危惧種ならば、その動物がなぜ絶滅に瀕しているか、それを止めることはできるかどうか。人間の活動や生活を含



景観デザインのリニューアルで、全体の見え方が変わりました。

め、人と動物と環境がどう関わっているか、見て、感じて、考える場ともいえます。周辺の植物にも触れながら、『ZOOMO』は飼育動物やそれを取り巻く環境と関わる架け橋になっていこう、そんな強いメッセージを持って取り組んでいきます。荒井さんの言葉を踏まえて、実際に園を歩いてみると、その意図がちこちこち感じられます。例えば、園内に通じるアプローチでは大きな動物のオブジェが出迎えてくれ、一つずつメッセージが記されていました。まるで屋外アートのようであり、園内への期待も高まります。荒井さんは、全体のランドスケープデザインにこそリニューアルのポイントがある、と話します。

「まず、動物の見せ方が変わります。」